

上箕田遺跡（第 9 次）発掘調査の成果

調査期間 平成 30 年 11 月 20 日～29 日

所在地 上箕田一丁目 2617 番 2

調査面積 69.95 m²

位置と環境

上箕田遺跡は鈴鹿川下流域の三角州性扇状地に形成された自然堤防上に位置します。やや下流には同様の自然堤防上に立地する遺跡として大木ノ輪遺跡が、上流側には低位段丘の末端に立地する遺跡として須賀遺跡があります。

昭和 35 年（1960）、水田の床下げに伴い弥生土器が出土したことから遺跡が発見されました。出土した遺物の中に鹿を狩る場面を描いた絵画土器があることから、当時はニュースとして大きく取り上げられました（出土地点は地元関係者の弁によると今回の調査地の南 50m 地点の水田とのこと）。

昭和 35 年の神戸高校郷土研究部による第 1 次発掘調査、昭和 43 年（1968）の鈴鹿市教育委員会による第 2 次調査により、弥生時代全般にわたる遺構・遺物が確認され、伊勢湾西岸を代表する大集落遺跡として周知されることとなりました。以後、開発工事に伴い 8 次にわたる中・小規模の調査が行われていますが、広大な遺跡の範囲に対して面積はあまりに僅少で、集落の全体像には迫りえていないのが実状です。

今回の調査地周辺では、南東 150m 地点の鈴鹿市東消防署の建設に際し実施された第 5 次調査において、縄文晩期の流路、弥生中期前葉の方形周溝墓 2 基のほか、平安の掘立柱建物・溝等が確認されています。北西約 130m の鈴鹿市箕田出張所建設に際し行われた第 6 次調査においては、条里地割に関連する中世の溝と井戸が確認されました。

主な検出遺構

第 9 次調査においては、溝 7 条、土坑 2 基、流路 1 条を検出しました。溝はほとんどが方形周溝墓の周溝とみられ、少なくとも 2 基の存在が確実で、また土坑についても土壇墓である可能性が高いです。以下、主な遺構について詳述します。

方形周溝墓 SX0914

溝 SD0901・SD0904 によって区画されます。周溝の中央部の幅が広がり深く掘られて外肩が丸みをおび、端部は徐々に浅く狭くなって、周溝の四角が切れるタイプです。溝 SD0904 の状況から一辺 5～6m 程度の規模が想定できます。墳丘盛土は失われ、主体部は不明です。溝 SD0904 から出土した土器から、弥生時代中期前葉に築造され、中期中葉まで追葬や祭祀行為が続けられたと見られます。

方形周溝墓 SX0915

溝 SD0905・SD0911 及び溝痕跡 SD0913 により区画され、一辺 4m 四方の規模が想定できます。北辺溝や墳丘盛土は全く失われ、主体部も不明です。確実に供伴する遺物はありませんが、方形周溝墓 SX0914 とは異なり、周溝の幅が狭く幅の変化もほぼ無く、四角が切れるタイプです。このタイプは第 5 次調査や須賀遺跡第 6・8 次調査などで確認されていて、弥生時代前期末～中期前

葉の遺物を出土していることから、この遺構についても同様の年代が想定されます。

溝 SD0904

方形周溝墓 SX0914 の東辺周溝にあたります。延長 3.8m を検出し、最大幅は 1.5m、深さは 0.65m を測ります。南端に向って急激に浅く狭くなり、端部では幅 0.5m、深さ 0.08m 程度となります。埋土は上・中・下層に大別されます。中層から完形の弥生土器細頸壺が南向きに横たわって出土し、下層からは別個体の細頸壺一個体分が大きな破片に分かれて出土しました。

土坑（土壙墓） SK0906

長さ 1.4m、幅 0.75m の隅丸方形をした土坑です。深さは 0.23m で、断面は箱状です。土坑中央からやや西よりで、完形の弥生時代前期壺が口縁部を北東側長辺に向けて横たえられたように出土しました。底部からは若干浮いていました。遺構の形状と土器の出土状況から、土壙墓の可能性が高いと考えます。

流路 SR0912

調査区の北東隅で西肩を確認しました。全く締まりが無く、褐色をしたピュアな砂礫が下部まで続いており、洪水時の流路と見られます。範囲確認調査の際、東に設定したトレンチ（今回の調査区から東に外れた所）では、地山を締まりの無い砂礫が覆っていたので、流路は数m幅で東に広がっているものと見られます。

主な出土遺物

今回の調査で出土した遺物はすべて弥生土器で、整理箱 3 箱と少量でした。

土坑墓 SK0906 からは完形の広口壺①が出土しました。頸部に 7 条、胴部最大径の直上に 6 条のへら描き沈線を施します。弥生時代前期後葉の土器です。

溝 SD0904 からは 2 個体の細頸壺が出土しました。中層出土の完形の細頸壺②は、頸部に櫛（貝殻？）描直線文を多条に施し、胴部上半は波状文と直線文を交互に描き充填しています。同部下半は縦方向のへらミガキが施されます。中期中葉に降ると見られます。

下層出土の細頸壺③は頸部に多条の櫛描直線文を施すのは同様ですが、胴部は最大径の直上に櫛描きの波状文と直線文をそれぞれ 1 条施します。頸部との間はへらミガキが施され無文です。こちらのほうが古い様相を示し、中期前葉に遡ると見られます。

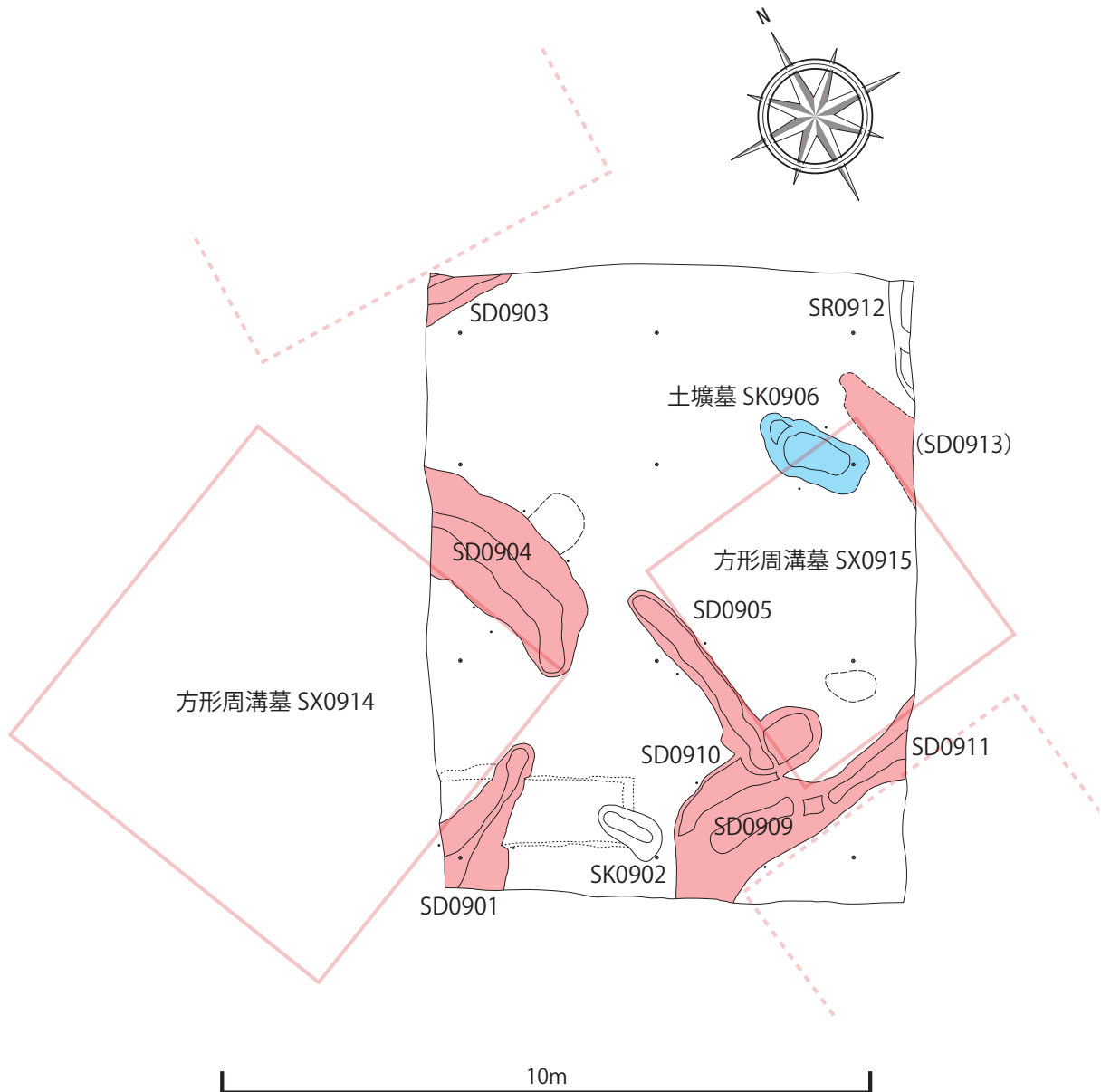
②と③は同一遺構から出土し、ほぼ同器形の土器であるにもかかわらず、文様に若干の年代差が認められます。③が周溝墓築造時に墳丘に供献され、墳丘の崩落とともに転落破損したもので、②についてはその後かなり時間を置いてから同周溝墓を利用して追葬が行われたか、追善的な祭祀が行われた際に新たに供献されたものと考えられます。

調査の成果

今回の成果として、前期の土壙墓の可能性が高い土坑と、弥生時代中期前葉に遡る方形周溝墓群の存在を確認できたことが挙げられます。遺跡の東辺部に当たる調査地一帯が、前期から中期にかけて集落の墓域となっていたことを示します。弥生時代中期前葉の方形周溝墓は第 5 次調査でも確認されており、墓域がそのあたりまで帯状に分布している可能性が高くなってきました。方形周溝墓を構成する溝の方位は両者とも N10～20° W 前後で、おそらく当時の鈴鹿川支流の流路とそれに

並行して形成される自然堤坊の走行に沿ったものでしょう。

上箕田遺跡一帯，特に南部の水田域では，戦後の床下げや昭和後期の圃場整備事業で削平が進み，遺構の残りがあまりよくないとの悲観的な見方がありましたが，今回の調査によって前期～中期の遺構も耕作土の直下にかろうじて残っていることが確認できました。また，関係者からの聞き取りにより，有名な絵画土器の出土地が今回の調査地から南に2枚離れた水田であることも確認でき，南側には後期の遺構も埋蔵されているかもしれません。今後も周辺の開発には注意を払い，調査を継続していくことが必要です。



上箕田遺跡第9次調査 遺構平面図



弥生土器広口壺①出土状況（北から）



弥生土器細頸壺②出土状況（北東から）



弥生土器細頸壺③出土状況（南から）